第　39　号

県中教研 道徳部会だより

発 行 日　令和6年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　宮森　　学
題　　字　金山　泰仁　先生

「目標は小刻みに」

指導主事　開井　千晴

「目標は小刻みに」この言葉は、私自身が受けた道徳の授業で一番心に残っている言葉です。下村湖人氏の「マラソンの途中で挫けそうになったとき『あの立木まで走ろう、次は、あの電柱まで……』と小さな目標を立てては達成し、最後にはゴールする」という話です。私にとって道徳の時間は、どんな発言をしても先生が受け止めてくれ、先生や友達と対話することが楽しい時間でした。特に、この授業では「すぐに諦めてしまう自分でも、下村さんの真似をしたら何かが成し遂げられるのではないか、部活動で実践しよう、数学のドリルを毎日続けてみよう。」と自己内対話をしたことを鮮明に覚えています。

そして、大学受験、教員採用試験と困難に立ち向かうときにはこの言葉を思い出し、小さな目標を決め、一つずつ達成することができました。また、職場環境が変わるたびにこの文章を読み直し、新しい環境に臆することなく小さな目標に向かって努力を重ねれば大丈夫だと勇気を奮いました。

さて、私は、第67回研究大会の折に、立山町立雄山中学校の授業を参観させていただきました。授業では、担任の先生と生徒の温かな関わりの中「真の友情」について真剣に考える姿が見られました。きっとこの教室の中にもいつか友達との関係に悩んだとき、今日の授業と先生の優しさを思い出し、こつこつとよりよい人間関係を築いていくことができる生徒がいるに違いないと感じています。

奇しくも、道徳の楽しさを教えてくださった恩師の名前を「富山県中教研会報」で見付け、現役で活躍しておられることを知りました。恩師のような授業ができたと手応えがあったのは数えるほどです。「考え、議論する道徳」「ICTの効果的な活用」……これからも努力を続けていきたいと思います。

（東部教育事務所）

「考え、議論する道徳」に向けて

県部長　宮森　　学

令和３年度から令和５年度は、内容項目の４つの視点のうち「主として人との関わりに関すること」を中心に、また、副題を「発問の工夫」（令和３年度）、「話合いの場の工夫」（令和４年度）、「指導と評価の一体化」（令和５年度）として研究を進めてきた。この３年間の研究により、発問の吟味によってより深く価値に迫ることができること、話合いの場の工夫によって多面的・多角的に考えさせることができること、指導と評価の一体化を図ることで生徒のより大きな成長を促せることが明らかになった。また、構造的な板書の工夫、ICTの活用等の研究でも大きな成果があった。

しかし、依然として、登場人物の心情理解のみに偏った授業、決まりきった答えを言わせたり書かせたりする授業、教師と指名された生徒だけのやり取りになっている授業が多く見受けられることが課題となっている。過去の自分の授業を振り返ってみても、生徒の想定外の発言に戸惑い、その発言の意味を理解しないまま、自分のやりたい段取りで指導し、自分の言いたいことを伝えていたことを思い出す。

先日、ある学校で道徳の授業を参観する機会があった。その授業では、中心発問に十分過ぎるほど時間をかけ、生徒の様々な考えを引き出していた。何度も「他者の考え」に心が揺さぶられ、自身に問いかけながら「自分の答え」を探し求める生徒の姿があった。教師のファシリテーションの素晴らしさにも感心し、これこそが生徒一人一人が、答えが一つではない道徳的な課題を自分自身の問題として捉え向き合う「考え、議論する道徳」であると感じた。

今後は現在の課題を捉え、改めて「考え、議論する道徳」への転換を推進し、生徒が「主体的・対話的で深い学び」を得ることができるよう実践的研究を進めていきたい。

（高・五位中）

第67回 研究大会報告

東 部 地 区　　立山町立雄山中学校

東部地区大会では、立山町立雄山中学校を会場に木下陸教諭、竹村葉月教諭による授業提案が行われた。２つの授業の概要と指導助言について報告する。

〈第１学年〉　木下　陸　教諭
主題　支え合い、励まし合う友情　B
教材　「吾一と京造」
（出典：廣済堂あかつき「中学生の道徳１」）

導入では、事前アンケートをテキストマイニングの形で提示し、本時のねらいとする道徳的価値に対する生徒の関心を高める工夫がなされた。展開では、吾一と京造それぞれの心情に関する発問を通して、生徒たちは真の友情とは何か考えを巡らせていた。

協議会では、テキストマイニングの効果的な使用法や、ねらいとする道徳的価値に迫るための発問の工夫等について話し合われた。

上田徹主任指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・テキストマイニングを用いて、生徒の実態に沿った内容を取り上げることは有効であった。導入だけでなく、終末でもアンケートの結果を提示することで、生徒の考えの変容をみることができ、考えを深めることができる。
・発表生徒と授業者の１対１のやり取りだけではなく、生徒同士が反応し合い、様々な意見が出るような授業展開や雰囲気づくりが重要である。
・教材の内容に終始するのではなく、登場人物の様子を、生徒が自分のこととして捉えられるよう、発問や展開の工夫が必要である。

〈第２学年〉　竹村　葉月　教諭
主題　敬愛の念に基づく真の友情　B
教材　「嵐のあとに」
（出典：廣済堂あかつき「中学生の道徳２」）

相互に変わらない信頼と相手に対する敬意の念に基づく真の友情を育むことの大切さについて考える授業であった。導入では、「友達とはどのような存在か」という事前アンケートの結果をテキストマイニングの形式で示し、友情についての様々な価値観を共有することで、教材への興味・関心を高めていた。また、終末にも同じ発問を投げかけることで個々の生徒の考えを深めていた。

協議会では、時間に余裕があれば終末にもアンケート結果を提示することで、さらに生徒の変容が視覚的に捉えやすくなるという意見が出された。また、テキストマイニングを含めICTの有効活用について研修を深めた。

開井千晴指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・事前アンケートにより、授業前に生徒の実態把握ができていた。また、アンケートは生徒が考えを深めるための手立てとしても有効であった。
・授業者は多様な意見を引き出すことが大切である。さらに、生徒の意見に対して問い返し、対話しながら授業を展開していくことによって、考えをより深めることができる。
・ICTには、可視化、共有化、活性化・深化、分析、蓄積等、いくつもの有益な機能があり、目的に応じて有効に活用していく必要がある。今後も有効活用のための研究を進めて欲しい。

堀　　瑶（滑・滑川中）
真岩友莉奈（下・入善中）

〔研究主題〕主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。―評価との一体化を意識した指導―

西 部 地 区　　氷見市立西條中学校

西部地区大会では、氷見市立西條中学校を会場に笹木邦紘教諭、中山隼人教諭による授業提案が行われた。２つの授業の概要と指導助言について報告する。

〈第２学年〉　笹木　邦紘　教諭
主題　敬愛の念に基づく真の友情　Ｂ
教材　「嵐のあとに」
（出典：廣済堂あかつき「中学生の道徳２」）

幼なじみである２人の関係の変容を通して、「真の友情とは何か」を考える授業であった。役割演技を取り入れ、道徳的行為の場面を想起・追体験させた。生徒が登場人物の心情を共感的に捉え、自分事として考える手立てとなった。また、振り返りの時間を十分に確保したことで、生徒は心の中で自分自身と対話し、考えを深めることができた。

山越励子指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・役割演技によって、生徒は道徳的行為の場面について焦点化して考えることができた。自分事として考えさせたい場面では、登場人物に十分に共感させた上で役割演技を行ったり、「自分だったらどう思うか」と切り返したりすることが有効である。
・道徳では、多くの生徒からすぐに出てくる「大きな意見」よりも、少数の発言やつぶやき等の「小さな意見」に、ねらいに迫る意見があることが多い。そのような意見を広げ、議論していくことが大切である。その際、教師自身が授業のゴールを明確にしておくことが必要である。

〈第３学年〉　中山　隼人　教諭
主題　思いやりの心　Ｂ
教材　「月明かりで見送った夜汽車」
（出典：廣済堂あかつき「中学生の道徳３」）

導入では、事前に行った中心発問の状況に似た場面についてのアンケート結果が紹介された。さらに、終末でもアンケート結果を再度確認させ、生徒が自分との関わりを意識しながら考えを深めることができる工夫があった。また、学習形態を、①個人で考える、②グループで考える、③再度個人で考える、④全体で話し合う、と順を追って変化させたことは、生徒に道徳的価値について多面的・多角的に考えさせる一助となった。

矢野優子指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・導入でアンケート結果を提示したことで、自分との関わりで考えさせたり、問題意識をもたせたりすることができていた。
・発問を構成する際には、何に気付かせたいかを明確にする。単に思いやりや感謝が大切であることだけではなく、相手の立場や気持ちに対する配慮、そして、感謝の対象の広がりについても理解を深めていくことが大切である。
・深い学びにするためには、分かりきったことを言わせたり書かせたりするのではなく、「こんな考え方もあるのだ」など、発見と納得のある授業にすることが求められる。そのために、生徒の振り返りから生徒の様子を見取り、授業改善に生かしてほしい。

亀ヶ谷憲史（南・井波中）
新井　　稜（小・大谷中）

第67回 研究大会報告

第67回東部地区大会

令和５年度東部地区大会では、京都産業大学の柴原弘志教授に、アドバイザーとして「『特別の教科　道徳』における質の高い学習指導と評価」と題してご講演いただいた。

１　全員参加・多様性を生かした授業

教師は、国語の読解力の差が道徳の学びの差となってしまうような道徳科授業をしてはならない。本日の授業では､あらすじを先に確認したり、テキストマイニングを使ってテーマを共有したり、イラストを提示したりする工夫があった。教材を効果的に活用するには、生徒全員を共通の土俵に上げておくことが大切であり、早い段階で中心発問に入って、多様な意見からじっくりと考えさせたい。

２　短期間での授業改善のために

一人が１つの教材を全教室で行うローテーション道徳とは異なる、「リレー道徳」を提案したい。道徳の時間をずらして行い、一クラス終わるごとに板書の写真へ振り返ったメモを記入し、次のクラスの授業に生かす。PDCAサイクルが機能し、授業力向上につながるだけでなく、担任が自分のクラスの評価を適切に行うこともできる。そのリレー道徳での板書メモを次の学年でも活用し、改善を加えていくことで、さらなる授業改善につながる。

３　指導と評価の一体化

まず､主体的･対話的で深い学びの実現には､「内容知」と「方法知」について深く理解する必要がある。一つの内容項目でも、小学校から９年間の指導計画がある。小学校で何を学んできたかを理解していること（内容知）で、正しく指導・評価することができる。そしてその評価は、生徒にフィードバックをすることが重要となる。フィードバックはノートやワークシートだけでなく、授業中でもできる。「今、自分の経験を基に発言できたね。」「これからの生き方について考えられたね。」などと伝えることで､周りの生徒も「学び方」を学ぶことができる（方法知）。学習指導要領に記載されている「求められる学び方」を教師だけが知っているのではなく、目の前にいる生徒と共有したい。「方法知」の共有をすることで、より質の高い授業が可能となる。

４　深い学びのために

価値理解に加えて、自己理解・他者理解・人間理解をより深めるためにはどうすればよいか。授業の中では、同じような状況でも、自分とは異なる判断や反応を示す登場人物や他者がいる。そうした多様性こそが重要であり、自己の考えと比較させることから生き方についての学びを深められるような授業にしたい。振り返りでは、「道徳的価値をどう捉えて今後生きていこうとするのか」というような、人間としての自己の生き方への考えが深まるものにしたい。そのためには、教師自身が教材で取り扱おうとする価値等についての確かなイメージをもって臨み、授業の中で示される生徒の多様な考えに対して、「そんな考えもあるね。」と受容しつつ、教師も一人の人間として生徒と対話する。時には、自分をさらけ出して対話できる授業があってもよい。そのためにも、内容項目の系統性・発展性を意識した深い理解が必要となる。

（富・興南中　福島あゆみ）

第67回西部地区大会

令和５年度西部地区大会では、岐阜大学の柳沼良太教授に、アドバイザーとして「『考え議論する道徳科の授業』-指導と評価の一体化を目指して-」と題してご講演いただいた。

１　「考え議論する道徳」の定義

「考え議論する道徳」とは、答えが一つではない道徳的な課題に、一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う学習である。そして、その学習を通して､個人が直面する様々な状況の中で、自分はどうするべきか、自分に何ができるかを判断し、実践できるようにしていくための資質・能力を育成することを目標としている。

２　多様で質の高い指導方法

（１）自我関与が中心の学習

この指導法のねらいは、登場人物の心情を自分との関わりで考え、道徳的諸価値の理解を深めることである。従来のような「登場人物の心情を読み取る指導」は、生徒が登場人物の出来事を他人事として捉えがちである。生徒が自分事として考え、判断するためには、「自分だったら、主人公のように考え、行動するだろうか」のように、登場人物に自我を関与させて、問題解決の場面に向き合わせる発問をすることが重要である。

（２）問題解決的な学習

道徳科における問題解決的な学習のねらいは、生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するための資質・能力を養うことである。具体的な問題設定として､過ちを許す立場（相互理解･寛容）と、自分勝手を許さない立場（規則遵守）で対立・葛藤がある場合でどうすればよいかを考えるものがある。また､友達と仲良くする立場(友情･信頼）と、同調圧力に流されない立場（公正･公平）が対立した場面でどうすればよいかを話し合うものもある。このように、既に分かっている道徳的諸価値の再確認にとどまらず、答えが一つではない問題に生徒自身が向き合い、どのように解決するかについて考え、議論する授業展開が求められる。その際には、「どのような人になりたいか」というポジティブな自己像をイメージさせることで、よりよく生きようとする態度を涵養することができる。

（３）体験的な学習

体験的な学習のねらいは、役割演技等の体験を通して、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質や能力を養うことである。主人公の心情を理解することのみをねらいとした指導法ではないことに留意する必要がある。問題解決のためにどのような行動をとればよいかを考えたり、教材で提示された問題と共通した新たな場面を提示したりするなど、多面的・多角的に問題と向き合う学習とすることが大切である。

３　評価の工夫

道徳科で目指す姿と成果をしっかりと見取って評価をするために、道徳開き（最初の時間）で生き方の目標設定を行い、道徳カンファレンス（最後の時間）で生徒自身が自分の成長を自覚できるよう工夫することも必要である。そのためにデジタルポートフォリオ等を活用し、道徳を学習した軌跡や成果を蓄積して欲しい。

（砺・庄西中　齋藤　光利）